

美人はみんな清潔マニアです

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

私は、清潔について書いた本の中で、「生きている時もそうだが、死ぬ時でさえ清潔に死にたいというのが最大の関心事なのだ」と述べました。『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』ビワコ・エディション版162頁)

最近、この言葉を地で行くような例に出会って、我ながら驚いているのです。

知人の奥さんの話です。

彼女は、或る病院で MRI 検査を受けたのですが、その結果を見た医師から、すぐにでも入院して手術を受けるようにと告げられました。

彼女の夫は、即刻入院するための準備を始めたのですが、奥さんは、その前にどうしても美容院へ行くと言い出しました。美容院へ行けば、一日か二日は入院が遅れます。夫との間で言い合いになったのですが、奥さんは頑としてゆずりませんでした。

体調が悪かったため長い間美容院へ行かなかった。そのため髪はひどく乱れているし、かなり白髪も目立つようになった。ちゃんと整髪してでなければ、入院なんかできません、というのが奥さんの答でした。

夫は、入院の遅れが命取りになったらどうするんだ、とおどかし半分で言ったそうです。そしたら、奥さんは、それでもかまわない、と答えたそうです。

実は、最初に病院へ行って診断を受ける時もたいへんだった、と夫が語りました。奥さんはやはり美容院へ行ってからと言い出し、説得するのにだいぶ骨を折ったそうです。

結局、病院へ行く前日に入浴し、洗髪して、身体や頭髪を自分で整えていくということで妥協したといいます。

しかし、それと入院とは異なる。今度は、自分の知らない間に、いろんな人に眺められる。ちゃんとした身だしなみが必要だ、というのが奥さんの主張でした。

夫がそれに反対すると、あんたは女の気持ちが分からないのね、と言われたそうです。

女の気持ちって、そんなものなんですか？ 私にもいまひとつ分からないところがあります。私の妻に意見を求めると、その奥さんの気持ちがよく分かるという答でした。

「それに、あの奥さんは美人だから」と妻が言いました。

えっ、美人だったら、自分の美や清潔を、死に対してさえ優先させることができるのでしょうか。

死ぬ時でさえ清潔でいたいということを私が本に書いたのは、心身を含めた非常に広い意味での「清潔」ということを考えたからでした。

それがいま、こういう具体的な形で、一つの例に出会うとは思ってもみなかったのです。

このことについて、もう少し深く考えてみたいと思うのですが、その前に、この入院と手術の話が結局はどうなったのか言っておきたいと思います。

実は、この話は、私がフランス滞在中に起こったことでした。病院というのは、パリ郊外にある、診療費が高いことで有名な病院で、手術を勧めたのはフランス人医師でした。

この医師は婦人科専門で、器官障害に対する新しい手術法を開発したことで、この分野での第一人者と目されていました。この医師の診断なら間違いないと思い、私の知人夫妻もすっかりその気になっていたのです。

しかし、冗談から駒と言いますか、妙なところから話が急展開しました。

「家内が、ビョウインへ行く前にビョウインへ行くと言うから、最初は何のことかよく分からなかったんだ。今の病院へ行く前に、いったいどの病院へ行きたいのかってね」

私の友人が冗談まじりにこう言ったのを受けて、私がふと洩らした言葉がきっかけになりました。

「その病院へ行く前に、できれば日本の病院で診てもらったほうが良いかもしれないな」と私は言ったのです。

「何と言ったって、手術は大ごとだし、それに、こちらの病院では言葉の問題もあるから、面倒なことにならないとはかぎらない」

手術ということで落ち込んでいた奥さんがこの話に飛びついてきたのは、むしろ自然なことでしょう。病院からもらった MRI 検査のデータを持って、友人夫妻は急ぎよ日本に帰国し、かかりつけの医師に診てもらいました。

その結果、手術は不要ということになったのです。奥さんが体調をくずしたため飲んだ薬が原因で、ホルモン異常が起り、出血などの症状が現れた。器官の一部がやや膨張しているが、これはもうだいぶ前からの症状で、手術をしないでも直せるという診断でした。

医師の診断について、素人の私たちがとやかく言う筋合いではありませんが、手術というのは治療の最後の手段だという認識があります。それからすれば、手術をしないでいられるということは大きなことです。これに越したことはありません。

友人夫妻も、日本の医師の診断に従うことにし、しばらくは本国で暮らすことになりました。そしていま、この奥さんは、以前と同じ健康状態を取り戻し、時々医師の診察を受けながらも、美と清潔の追求に励んでいます。

さて、「美人はみんな清潔マニアです」というのが本論のテーマですが、この奥さんを見ていると、美人は「みんな」という言い方をしても、決して間違っていないように思えてきます。

と言いますのも、いくら生まれつき恵まれた容姿を持っていても、「努力無し」に美人であり続けることはできないということを私は感じるからです。

放っておいても美人でいられるというのではなく、美人には「成る」ものだということを、私は強く感じます。

私自身、六年半ぶりにフランスから日本に帰ってきたのですが、何よりも驚かされたのは、六、七年前に映画やテレビのスクリーンを賑わせていた美女たちが、あまりにも変化していたことでした。

年齢を感じさせはするものの、相変わらず美しい人もいれば、一見誰なのか分からないという人もいます。一、二年の空白ならば目につかないような変化も、六、七年の歳月を置けば、歴然と見えてくるのが分かりました。

年を取っても相変わらず美人でいられるのは、美の追求に成功したからではないか、たゆまぬ努力の成果ではないか、と思わされたのは、彼女らの雑談を聞いているときでした。

日々の生活が大いに関係しているのです。美しさを保つためには、日常性とか自然体を重視する必要があると考えられます。

ところが、往年の美女たちの多くは、職業上、日常性や自然体に留まってはられないという事情があります。美容整形をしたな、と思われる顔が少なくありませんでした。

衆人の目に晒されるという宿命がある以上、シワやタルミをすこしでも少なくしたいという気持ちは分かります。整形手術には成功したらしく、ピンと張りきった、ツルツルした肌で、年齢を感じさせない顔立ちの人もかなりいました。

ただ、そういう人に限って、一見したところ誰なのか分からないということも多いのです。そのいちばん大きな原因は、顔の陰影が失われたことにあります。

まさに、その陰影こそが、彼女の個性を作り出し、彼女の魅力になり、したがって彼女の美しさだったということが言えます。

眼と眼の間隔とか、下がり具合とか、くぼみ加減とか、通常は欠点と思われるような口元のゆがみや表情のアンバランスなどが、彼女の個性的な美を作り出し、私たちを惹きつけていた、と言うことができます。

そういう陰影の失われた、お人形のように人工的な顔は、それ自体としては美しいと言えるのかも知れませんが、彼女自身の、彼女にしかない美しさとは言えません。

私の妻が、顎の下のたるみをつまんで、ここんところをちょっと切ればなどと言いますが、私は、医療の場合と同じように、できるだけ手術はしないようにと主張します。

もともとの彼女の表情が失われてしまうことを恐れるからです。その表情は、彼女が長年かけて育て上げてきた個性であり、美しさだと言えるのではないのでしょうか。

職業上、美容整形の有効な場合もあるとは思いますが、一般家庭の女性たちが、右にならえ式に同じ方法を真似るのはどんなものでしょうか。まずは、日常的な自然体を活かすことから考える必要があると思うのです。

容姿の美しさに最も関係があると思われるもので、世人があまり注意しないのは、精神的な要素です。美しさをいつまでも保っている女優やタレントの話を知っていると、彼女らが幸福な生活を送っているらしいことが判ります。

たとえ波乱に満ちた、はたから見ると決して順調とは言えないような生活を送っている人でも、それを幸福に転ずるような精神力がありさえすれば、その中に含めてもよいでしょう。

そういう美しさは、何よりも目や表情に出てくると言えます。優しさや思いやり、公平さや知性の輝きが目に見え、表情を作り出すようになれば、多少のシワやタルミなど吹っ飛んでしまいます。あるいは、むしろ、そういう老化さえが或る種の魅力になると言えましょう。

そして、ここで重要になるのが、美そのものの追求ばかりでなく、「清潔」の追求だということが明らかになります。

美と清潔は似たような概念ですが、根本的に異なる面があります。私は、先に挙げた本の中で、このことについても述べました。『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』（ビワコ・エディション版148頁）

精神の美と精神の清潔、身体の美と身体の清潔、いずれも追求する対象としては同じもの、同じキレイさだと言えます。しかし、追求する仕方は異なります。

美の追求は、自分独りの追求でも成り立ちます。自分だけが美しくなれば目的は達せられます。極端な言い方をすれば、他人が醜くなればなるほど、自分の美が際立つでしょう。つまり、最終的には、競争の原理に支配された、自己中心的な追求になってしまいます。

清潔の追求は、自分独りでは成り立ちません。自分がいくら清潔な服を着ていても、周りの人間がみな不潔ならば、それによって汚されてしまいます。

心の優しさは精神の清潔ですが、自分がいくら優しく思いやりのある心を示しても、他者の心にそれを受け入れる清潔さが無ければ、何も通じません。

つまり、清潔の追求は、自分のためばかりではなく、他者のためにも美やキレイさを求めようとす、いわば利他的な行為だと言えます。

精神的な要素が美人を作り上げるのだとしたら、優しさや思いやり、献身や自己犠牲といった精神の清潔を求める行為が何よりも必要だということになるでしょう。

マニアという言葉は、必ずしも病的な意味ではなく、「情熱を持った人」という意味でも使われます。その意味で、美人に成る人はみんな清潔に情熱を持っている、すなわち「清潔マニア」だ、と言ってもいいのではないのでしょうか。

美人女優として評判の高い或る女性が、バラエティ番組で料理を作る場面がありました。彼女は、派手な爪飾りの付いた指で、サラダをかき混ぜていました。あのサラダを人に食べさせるつもりなのかと思いますと、彼女の顔も美人どころか、アホ面に見えたものです。

[2007/01/19 magmag]